1(15/05/09)

一　人の、学を為すゆゑんのものは、経史の二途のみ。是れを除いて外は、則ち千巻万冊も、総て無用に属す。

人之所二以爲一レ學者、經史二途而已、除レ是而外、則千巻萬冊、總屬二無用一

【訳】人が、学問を行うのは、経書と歴史書の二つについてだけである。これを除いてほかは、多くの書物もすべて役には立たないものだ。

二　経は本を立つるゆゑんなり。史は務めに応ずるゆゑんなり。本を立て務めに応ずれば、学者の事畢る。

経所二以立一、本也、史所二以応一レ務也、立レ本応レ務、学者之事畢矣、

【訳】経書を学ぶのは人の生き方の根本を確立するためである。史書を学ぶのは、自分がしなければならない務めを成し遂げるためである。生き方の根本が確立し、自分のしなければならない務めができれば、それで学ぶ人のしなければならないことは終わる。。

三　昨、人の、謝無村の画一幅を持ち来たり相示すあり。図ふに、蓋しいはゆる黄鶴楼なるものなり。これに対すること終日なるも、殆んど倦むを忘る。

昨有レ人持二謝蕪村畫一幅一来相示一、圖蓋所レ謂黄鶴樓者也、対レ之終レ日、殆忘レ倦矣、

【訳】昨日、ある人が与謝蕪村の画を一幅持ってきて見せてくれた。見るとそれはいわゆる黄鶴楼を画いたと思われるものである。これを求め、一日中前に置いて飽きることなくながめていた。

四　北風、窓を吹き、寒、忍ぶべからず。炉を擁して酒を酌み、纔かに以つて日を送る。

北風吹レ窻、寒不レ可レ忍、擁レ爐酌レ酒、纔以送レ日、

【訳】北風が窓に向かって吹き、寒さはがまんできないほどだ。炉端で酒を酌み、

やっと日を過ごしている。

五　金鼓は耳を節するゆゑんなり。旗幟は目を節するゆゑんなり。金鼓旗幟、苟くも善くこれを用いれば、則ち百万の衆といへども、一人を使ふがごとし。

金鼓所二以節一レ耳也、旗幟所二以節一レ目也、金鼓旗幟苟善用レ之、則雖二百萬之衆而如レ使二一人一、

【訳】軍中で用いる鐘と太鼓は耳で指示を与えることだ。旗は目で指示を与えることだ。鐘や太鼓や旗は、かりにもうまくこれらを使えば、百万の民衆がいたとしても、ただ一人を動かしているようなものだ。

六　生を忘るるは、生を得るゆゑんなり。死を怕るるは、死を免れざるゆゑんなり。是の故に古の師を行るものは、其の始め凶門より出づ。

忘レ生者、所二以得一レ生也、怕レ死者、所二以不一レ免レ死也、是故古之行レ師者、其始出二於凶門一、

【訳】人が生きているという意識の薄いのは、生きている渦中にあるからである。死を恐れるのは、死が免がれることができないことを知っているからである。この理由から昔から兵を動かす者は、出陣するときにあえて不吉と言われる北門から出て必死を示す。

七　三軍の衆、一人を以つて成敗を為す。是の故に将、勇なれば則ち衆強く、将、怯なれば則ち衆弱し。而して貪と暴と、疑と惑とは、併びて皆事を敗るゆゑんなり。

三軍之衆、以二一人一爲二成敗一、是故将將勇、則衆強、將怯、則衆弱、而貪之與レ暴、疑之與レ惑、併皆所二以敗一レ事也、

【訳】大軍の軍隊といえど、一人によって勝敗が決まる。つまり大将が、勇敢であればその軍隊は強く、大将が臆病であれば兵隊は弱い。それから欲が深いこと荒々しいこと、疑い深く迷いがあると、同じように全て事を失敗するもとである。

八　我、古の善く兵を将ゐるものを観るに、其の心を用ふることの苦しきゆゑんのものは、坐作・進退・分合・開闔の間にあらずして、尤も戦士の心を得るにあり。是の故に呉起、疽を吮ひて、卒の母泣き、楚王、師を巡りて、衆、纊を挾む、以つて見るべし。

我観二古之**善将**一兵者、其所二以用一心之苦一者、不レ在二坐作進退分合開闔之間一、而尤在レ得二戦士之心一、是故呉起**吮**レ疽、而卒之母泣、楚王巡レ師、而衆挾レ**纊**、可二以見一矣

【訳】私が、昔の上手に兵を率いる者を調べてみると、その心使いを多く用いているのは、立ち振る舞いや行動・規律のことではなくして、なににもまして戦士の心を掴むことである。このため戦国時代の衛の将軍呉起は、部下の兵士の悪性のでき物である疽を直そうとしてその膿を吸ったことから、下級兵士の母は泣いて喜んだ。楚王は軍隊を巡り兵の背中を撫でて激励したことで、兵隊は、綿入れの着物を着た気持ちになり感動している、これは見倣うべきことである。

九　古人言える有り、曰く、「席正しからざれば、坐せず」と。夫れ席の正不正、何ぞ此の身に関わらんや。然れども必ず正しくしかる後坐するゆゑんのものは、蓋し内正ければ則ち自ら外の正を好む。而して外の正、亦以つてその内を養うに足ればなり。是れ内外挾持の方なり。

古人有レ言、曰、席不レ正、不レ坐、夫席之正不正、何関二乎此身一、然所二以必正而後坐一者、蓋内正則自好二外之正一、而外之正、亦足二以養一其内一、是内外挾持之方也、

【訳】孔子は言っておられる。曰く、「座席がきちんとしていなければ座らない」と。いったい座席の正不正が、わが身に関わることか。しかしながら必ず座席を正してから座る理由というのは、思うに自分の心身が正しければ、そのときは自然に自分の外の周りが整然としていることが好きになる。だから、自分の周りが整然としていることは、自分の心身を養うことになるのだ。これは自分の内と外が互いに支えあっているということで、内外挾持の方法という。

一〇　諸生、毎朝早く起き、盥嗽梳櫛し、書室を掃き、机案を拭き、襟を整えて坐す。筆硯紙墨、皆定位あり。此れ我にありては、即ち今日受用の規矩法度にして、忽略にすべからず、怠慢すべから

ず。

諸生毎朝早起、盥　嗽梳櫛、掃二書室一、拭二机案一、整レ襟而坐、筆硯紙墨、皆有二定位一、此在レ我、卽今日受用之規矩法度、不レ可二忽畧一、不レ可二怠慢一、

【訳】塾生は、毎朝早く起き、顔を洗い口を漱ぎ、学習部屋を掃き、机を拭き、身なりを整えて自分の席に座る。筆や硯、紙や墨などは、皆決まった位置に置く。このことは、私にとって当たり前の守るべき規則である。おろそかにしてはならず、怠慢であってはいけない。

11(15/06/06)

一一　我窃に夫の草木の微を観るに、其の初め芽を吐くより、抽んでて幹と為り、枝となり葉となる。既にして天に参わり既にして偃蓋。彼、其の此に至る所以のものは、蓋し亦一気の綿々として止まざるの功なり。

我竊觀二夫草木之微一、從二其初吐レ芽也、抽而爲レ幹、而枝而葉、卽而參レ天、卽而偃蓋、彼其所二以至一此者、蓋亦一氣綿々不レ止之功也一、

【訳】私がじっと草木の様子を観察してみると、それは初め芽が出て、どんどん成長して幹となり、枝を広げ、葉を茂らせていく。やがて天を突くぐらいに高く伸びて、空いっぱいに広がっていく。樹がこのようになるのは一つのことに集中してひたすらに止むことなく精進して生きているからである。

一二　聖人、政を為すの道を論ずるに、食を先と為し、兵これに次ぎ、信又これに次ぐ。然れども此の三者に就いて、其の軽重を論ずれば、則ち信を要と為し、食これに次ぎ、兵又これに次ぐ。各意義あり、仔細に商量せざるべからざるなり。

聖人論二爲レ政之道一、食爲レ先、兵次レ之、信又次レ之、然就二此三者一、論二其輕重一、則信爲レ要、食次レ之、兵又次レ之、各有二意義一、不レ可レ不二仔細商量一也、

【訳】孔子は、政治の道を論じるに、食糧を一番にして、兵制を次にし、人民への信頼を次に述べている。しかしながらこの三者に就いて、その軽重を　論じれば、人民への信頼を最重要とし、食糧がこれに次ぎ、兵制がこれに次ぐとしている。それぞれに意義があり、仔細によく考えなければならない。

一三　徳を崇くし惑を弁ずるは、もと是れ両箇の工夫。其の実は則ち徳を崇くせんと欲するものは、惑を弁ぜざるべからず。惑を弁ぜざれば、則ち因って以って徳を崇くするなし。これを　要するに却って亦是れ一箇の工夫なり。

崇レ徳弁レ惑、本是両箇工夫、其實則欲レ崇レ徳者、不レ可レ不惑、不レ弁レ惑、則因無二以崇一徳、要レ之却亦是一箇工夫、

【訳】徳を高くし迷いを軽くすることは、二つのことだ。その中味は、徳を高くしようとすることは、迷いをはっきり明らかにしなければならないことだ。迷いがはっきりしなければ、徳を高くすることもできない。要するに徳を高くすると言うひとつのことに努力するだけである。

一四　学ぶものは惟恥づるを要と為す。恥づれば則ち憤り、憤れば則ち通ず。吾人の通ぜざるゆゑんのものは、只是れ当初恥ぢず憤らざるに由るなり。

學者惟恥之爲レ要、恥則憤、憤則通、吾人之所二以不一レ通者、只是由二當初不一レ恥不一レ憤也、

【訳】道を学ぶ者にとって恥じるということはとても重要なことである。恥じれば自分に憤慨し、奮起して努力する。やる気になって努力すれば、その道に通じる。我々がその道に通じないのは、そもそもが恥じるということをしなくて自分に対して憤りも持たず努力もしないからである。

一五　環堵の室は、蕭然として他の長物なし。机一脚、香一炷にして、独りその間に坐して、黙々参究す。嗚呼、此れ吾の学を為す所のものなり。

環堵之室、蕭然無二他長物一、机一脚、香一炷、獨坐二其間一、黙々參究、嗚乎此吾之所レ爲レ學者也、

【訳】私の小部屋は、がらんとしていて余分なものがない。机一脚を前にして、線香を一本に火をつける。私は一人でその小部屋に坐り、黙々と真理を究める。ああ、これが私の学問の仕方である。

一六　歳方に杪冬、光陰幾もなし。精を励まし書を読み、此の微效を冀ふ。

歳方杪冬、光陰無レ幾、**厲**レ精読レ書、冀二此微効一

【訳】冬も終わり、年月はそんなにない。精を出して読書に励み、その日一日、わずかな効果でも得られることを切に望んでいる。

17（20150905）

一七　昔人、牡丹を呼びて富貴と為し、菊を呼びて隠逸と為し、蓮を呼びて君子と為す。此の三者を画いて、これを一室の中に置き、独り其の間に坐すれば、悠然として自ら塵を出づるの想ひあり。

昔人呼二牡丹一爲二富貴一、呼レ菊爲二隠逸一、呼レ蓮爲二君子一、畫二此三者一、置二之乎一室之中一、独坐二其間一、悠然自有二出レ塵之想一

【訳】宋の周敦頤は言っている。牡丹の花をもって富貴の象徴とみなし、菊の花をもって名誉や富貴を避ける象徴とみなし、そして蓮の花をして徳の高い品位の備わった人とみなす。この三者を画いた軸を室に掲げ、一人に静かに正座すれば、穏やかに俗世間を離れて超越した気持ちになる。

一八陋巷に居りて、以つて其の真を養ひ、箪瓢を操りて、以つて其の志を求め、富貴を以つて其の道を妨げず、隠約を以つて其の心を変ぜず。確乎不抜、浩然として自守す。

居二陋巷一、以養二其眞一、操二箪瓢一、以求二其志一、不レ以二富貴一妨二其道一、不レ以二隠約一變二其心一、確乎不抜、浩然自守。

【訳】寂れた路地の奥に住んで真の生き方を養い、弁当箱一杯の食事と瓢（ひさご）の水筒一杯の水をとって志を求め、裕福になっても道を求めることを妨げず、貧乏になっても心を変えない。しっかりとして意思を変えることなく、物に屈しないで自分の考えを守る。

一九　志は高遠を期し、功は切近を貴ぶ。志、高遠ならざれば、則ち自足し易く、功、切近ならざれば、則ち学は実效なし。

志期二高遠一、功貴二切近一、志不二高遠一、則易二於自足一、功不二切近一、則學無二實效一、

【訳】志は大きく高く持ち、それを成し遂げるためには、身近なことをこつこつとやっていくことが大切である。志が高くないとすぐに満足してしまいやすく、また、實践が身近で具体的な事でないといくら学んでいても、なにも身につかない。

二〇　古人言へるあり、曰く、「精思力践」と。是の故に思は精ならざるべからず。精ならざれば、則ち義理透らず。践は力めざるべからず。力めざれば、則ち造詣終に浅し。

古人有レ言、曰、精思力践、是故思不レ可レ不レ精、不レ精、則義理不レ透、
践不レ可レ不レ力、不可、則造詣終浅、

【訳】昔の人が言っている。「精思力践」と。だから、考えることは精しくしっかり考えなければならない。精しくなければ、正しい筋道はわからない。そして、実践していくことは、努力していかなければならない。努力しなければ、成果を得ることはできない。

二一　山を背にして谿に向かい、纔かに茅宇を結び、棲遅偃仰、以って吾が身を終ふ。詩に云わずや「優なるかな游なるかな。以って歳を卒うべし」と。

背レ山向レ谿、纔結二茅宇一、棲遅偃仰、以終二我身一、詩不レ云乎、優哉游哉、可二以
卒一歳

【訳】山を背後にして谷に向かって、茅葺きの家を作って、その家で静かに暮らし、私の生涯を終える。詩経でも「ゆったり暮らし、年をとる」ということをうたってるではないか。

二二　其の位にありて言はざるは、固より過ちなり。其の位にあらずして言ふ、これを言ふも亦其の咎なり。

在二其位一而不レ言固過矣、不レ在二其位一而言、言レ之亦其咎、

【訳】言うべき立場の人が何も言わないのは、当然、過ちである。そして言うべき立場でない人があれこれいうのも、間違いである。

二三　身は事勢の外に超え、而して心は経綸の思いに苦しむ。

身超二於事勢之外一、而心苦二於経綸之思一、

【訳】我身を、世の中の動きの外において、世の中はどのようにあればよいかに心をくだく。

二四　斜めに竹林を穿ちて、一茅舎に到る。舎中に人あり。琴を左にし書を右にして、悠然として膝を擁して坐す。問はずして其の高世の人なるを知るなり。

斜穿二竹林一、到二一茅舎一、舎中有レ人、左レ琴右レ書、悠然擁レ膝而坐、不レ問而知二其高世之人一也、

【訳】竹林を横切って、小さな茅葺きの小屋のような家に着く。その中には人がいる。琴を左側に置き、書物を右手にして、悠々と膝を抱えて座っている。それを見ただけで、その人が高く世俗を超越した人だと分かる。

26（20151003）

二五　深谷水を引き、山に傍いて迴る。これを書窓の前に注げば、其の声潀然たり。静かにこれを聴けば、則ちまた以って耳中の塵垢を洗うに足る。

深谷引レ水、傍レ山而迴、注二之乎書窗之前一、其聲潀然、靜而聽レ之、則亦足二以洗二耳中之塵垢一矣、

【訳】深い谷の水を引き、山に沿って巡らせる。これを書窓の前に注げば、その音は水の流れる様である。静かにこれを聴けば、耳の中のけがれを洗ってくれる。

二六　諸生を召し業を肄はしむ。蓋し口中自ら語を占べ、彼をして

これを書かせしむ。亦以つて其の字を用ひ句を作らしめば、顛倒上下、措置、法あると否とを試みるに足るなり。

召二諸生一肄レ業、蓋口中自占レ語、使二彼書一之、亦足レ以試二其用一字作レ句、顛倒上下、措置有レ法與レ否也、

【訳】塾生を集めて課業を勉強させる。私が口頭で言葉を述べ、彼らにそれを書きとらせる。また、その書いた語句を用いて、文章を作らせれば、それが漢文の文法にあっているかどうか見るのに十分だ。

二七　書を読みて疑なきは、是れ書を読みて心を用ひざるの験なり。蓋し心を用ふること精なれば、則ち講習の間、心に礙あるを覚ゆ。心を用ふること粗なれば、則ち鹵莽滅裂、復た事あるなし。

讀レ書而無レ疑、是讀レ書不レ用レ心之験也、蓋用レ心精、則講習之間、心覺レ有レ礙、用レ心粗、則鹵莽滅裂、無二復有一事、

【訳】書を読んで疑問を抱かないということは、書を読んで理解をしようと努力していない証拠である。もし理解しようと一生懸命努力したならば、講義を聴く間に何か心にひっかかるものがある。理解をしようという気持ちが少なければ注意が散漫で支離滅裂となり書を読んでも何も得られない。

二八　泰華の高きは一簣に基づき、紅海の深きは、細流より成る。蓋し人の、学を為す、亦此くのごときものあるかな。妄りに自ら菲薄とし中途にして棄廃すべからざるなり。

泰華之高、基二於一簣一、江海之深、成二於細流一、蓋人之爲レ學、亦有二如レ此者乎、不レ可二妄自菲薄中途棄廢一也、

【訳】泰山や華山の高くそびえているのは、一杯のもっこの土からできているのであり、紅海の深さは、山からの小さな流れが集まったものだ。考えてみると、人が学問を完成させるというのも、このようなものだ。簡単に自分で卑下して途中で止めるようなことはしてはいけない。

二九　夫れ人、生あれば則ち形あり。形あれば則ち欲あり。欲あれば則ち憂ひあり。以つて憂ひを去らんと欲すれば、其の憂ひいよいよ大なり。蚩々然として憂ひと俱に生き、憂ひと俱に死す。

夫人有レ生則有レ形、有レ形則有レ欲、有レ欲則有レ憂、以欲レ去レ憂、其憂愈大、蚩々然與レ憂俱生、與レ憂俱死矣、

【訳】人というものは、命があるので、体がある。体があれば欲望がある。欲望があれば、悩みがある。欲望から離れたいと望むと、その悩みを増大させてしまう。愚かなことだが、悩みとともに生き、悩みを持ったまま死ぬ他は無い。。

三〇　昔諸葛武侯南陽に耕すや、固より聞達を諸侯に求めず。而るに劉先主帝室の胄なるを以つて、敢へて自ら驕らず、これを草廬の中に三たび顧みる。其れ然り而して後水魚のごとく交合し、情好日に密なり。古より君臣の遭遇の此くのごときもの、世に多くは見ざるなり。

昔者諸葛武侯耕二於南陽一也、固不レ求二聞達於諸侯一、而劉先主以二帝室之胄一、不二敢自驕一、三二顧之於草廬之中一、其然而後、水魚交合、情好日密、自レ古君臣之遭遇如レ此者、世不二多見一也、

【訳】昔、諸葛武侯（孔明）が、南陽に隠れ住んで、畑を耕していた。もとより、周りの領主などに自分の栄達を求めていなかった。一方で、劉備は皇室とつながりがあるような人だったが、それを自慢するようなことはなく、諸葛孔明の住んでいる草庵を三度訪れてお願いをした。そして、その後は水魚の交わりをし、お互いの気持ちは日に日に通じ合った。昔から、君臣の出会いで、このような出会いは、世に多くはない。

三一　夫れ武侯の、隆中に伏するに方りてや、眇然たる一農夫のみ。其の出でて明主に遇ふに及べば、則ち勲業赫烈、宇宙に震ふ。蓋し士の測るべからざること、此くのごときものあるか。

夫方二武侯之伏一於隆中一也、眇然一農夫耳、及二其出遇一明主一、則勲業赫烈、震

於宇宙、蓋士之不可測也、有如此者乎、

【訳】武侯（諸葛孔明）が隆中という山の中に隠れ住み、畑を耕していた。その姿はどう見ても、小さな一人の農夫であった。それが名宰相に会うことによって、その為す仕事は輝くもので、天地が揺れ動くようなものだ。考えてみると、一人の人がすばらしいかどうかが分からないものだが、これ程のことがあろうか。

三二　武侯の学は、予其の受くる所を知らず。然れども予其の子に与ふる書を観るに、澹泊寧静を以つて宗と為し、慆慢険躁を以つて戒と為す。蓋し先聖精一の旨を庶ふ。

武侯之學、予不知其所受也、然而予觀其與子書、以澹泊寧静爲宗、而以慆慢險躁爲戒、蓋庶乎先聖精一之旨矣、

【訳】武侯（孔明）の学問については、私は彼が何を学んできたかは知らない。しかし、私は武侯が子供に読ませた書物を観ると、飾らず穏やかなことを根本として、だらしなく落ち着きの無いことを戒めている。まさしく、孔子の細やかに一筋に生きる生き方を、強く望んでいるのだ。

三三　日用の間、目の見る所、耳の聞く所、而して身心の営為する所、手に任じて拈出して、文章にあらざるなし。彼の韓欧蘇曾は特其の巧且つ善なるもののみ。

日用之間、目之所見、耳之所聞、而身心之所榮爲、任手拈出、無非文章、彼韓歐蘇曾特其巧且善者耳、

【訳】日常生活の中で、目で見ること、耳で聞くこと、そして心の動くことを手に任せて書いていくと、文章にできないものはない。あの唐の韓愈、宋の歐陽修や蘇軾、曾鞏らは、その技巧が巧みでうまいというだけだ。

三四　臣虜の衣を衣、犬彘の食を食ひ、囚首喪面、詩書を談ず。此れぞ是れ老蘇、荊公を毀るの語なり。然れども反って以って其の修学精専の状を見るに足るなり。

衣、臣虜之衣、食二犬彘之食一、囚首喪面、談二詩書一、此是老蘇毀二荊公一之語也、然而反足二以見一其修學精専之狀一也、

【訳】捕らわれた捕虜の着るような衣を着て、犬や豚の食べ物のような賤しい食べ物を食べ、髪を伸ばしっぱなしにして顔をも洗わず、そんな様相で詩書について論じている。これは宋の文書家・蘇洵が玉安石を非難していることを書いたものだ。しかし、これは学を修めようと一生懸命になっている姿がよくわかるというものだ。

352015/11/07)

三五　尺幅の中、山を画き、水を画き、茅屋に架す。人影安らかにして、雲烟草樹其の間に点綴す。宛然として一箇の小天地なり。

尺幅之中、畫山、畫水、架二茅屋一、安二人影一、而雲烟草樹點二綴其間一、宛然一箇小天地也、

【訳】小さな掛け軸の中に、山を描き、水の流れを描き、茅葺屋根の家屋を構える。人の姿は安らかにして、雲とかすみ、そして草木はその間にほどよく配置している。あたかも一つの小天地である。

三六　学を為すは、譬うれば猶山に登るがごとし。辛きを喫し苦しきを喫して、歩歩力を著け、而る後能く千仞の高きに至る。高きに至れば則ち眼界自ら濶く、況味超然たり。

爲學、譬猶登山、喫辛喫苦、歩々著力、而後能至二千仞之高一、至高則眼界自濶、況味超然、

【訳】学ぶことは、例えてみれば山に登るようなものだ。辛さや苦しさを経験しながら、一歩一歩力をこめて歩み、ようやく頂上に達することができる。頂上に達すれば視界は四方に開け、俗世間から超越している気持ちになる。

三七　奥羽の行を為さんと欲するものは、東都の道を易しとし、東都の行を為さんと欲するものは、京師の道を易しとし、京師の行を為さんと欲するものは、郷閭の往来を易しとす。然らざれば則ち志気懶散し、衰

弱萎薾して、堂階庭除の間すら、尚歩趨を憚る。是の故に人の志を立つるは、遠く且つ大ならざるべからざるなり。後来の成就は良に此れに由るのみ。

欲レ爲二奥羽之行一者、易二東都之道一、欲レ爲二東都之行一者、易二京師之道一、欲レ爲二京師之行一者、易二郷閭之往来一、不レ然則志氣懶散、衰弱萎薾、堂階庭除之間、尚憚二歩趨一、是故人之立レ志、不レ可レ不二遠且大一也、後来成就、良由レ此耳。

【訳】東北地方に行こうとするものにとっては、江戸まで行くのはわけないことであり、江戸に行こうとするものにとっては、京都まで行くのはわけないことであり、京都まで行こうとするものにとっては、自分の村の中を行き来することはわけないことである。めあてを遠くに置くのでなければ、やる気は散漫となり、長続きせず萎んでいってしまい、庭のほんの狭い間すら、歩くのがおっくうになるものだ。だから、人が志を立てるのは、遠いそして大きなことにするべきだ。将来、事が成し遂げられるかどうかは、このことにかかっている。

三八　古人言へる有り、曰く、「前輩は皆背後に一陣の堅苦の工夫を為す」と。吾人の、学を為すや、少より死に至るまで、因循偸惰、荒廃して日を度り、曾つて此等の功を著けず。また何ぞ其の学の成らざるを怪しまんや。

古人有レ言、曰、前輩皆背後爲二一陣堅苦底工夫一、吾人爲レ學、自レ少至レ死、因循偸惰、荒廃度レ日、曾不レ著二此等之功一、亦何怪二其學之不一成哉、

【訳】昔の人の言葉がある。「前を行く先輩は、皆、人の見ていないところで一つの志を強く持ち大変な努力をしている」と。自分が学問をしているのは、少年時代から死を迎えるまで、しきたり通りにして、骨惜しみして怠けて、日々を過ごしていて、その大事な努力をしていない。これでは、どうして学問が成就しないか、ということは疑いないことではないか。

三九　夜来早く寝に就き熟睡し、一枕直ちに五更に至りて覚む。枕上黙々として、平生を回思す。顕然たる大過なしといえども、隠微の間、物に徇い慾を恣にし、悔ゆべきもの鮮からず。因りて爽然自失し、一旦改励の念を有す。

夜来早就レ寝熟睡、一枕直至二五更一而覺、枕上默々、回二思平生一、雖レ無二顯然大過一、而隠微之間、徇レ物恣レ慾、可レ悔者不レ鮮矣、因爽然自 失、有二一旦改勵之念一、

【訳】 昨夜は早く寝て熟睡し、一眠りして真夜中になって目が覚めた。枕元に床に座って静かに日々のありように思いを巡らせた。大きな過ちはないものの、これと気づかないようなところでは、物にとらわれ欲の出てくるままにしており、悔いることも少なくない。だから、ぼうぜんとして自分を失いそうになるが、すぐに思い返し、いっそう励み勤めようと思ったことである。

四〇 酒を飲まんか、茶を喫まんか。酒の味は甘く、茶の味は苦し。甘きものこれを飲めば覚えずして酔いに至る。心志混瞑し、以つて気体を乱す。苦きものこれを喫めば数碗にして乃ち止む。心志清涼にして、気体暢然たり。酒を飲まんか、茶を喫まんか。二者の間、選ばざるべからざるなり。（四〇）

飲レ酒乎、喫レ茶乎、酒之味甘、茶之味苦、甘者飲レ之不レ覺至レ醉、心志昏瞑、以亂二氣體一、苦者喫レ之數碗乃止、心志清涼、氣體暢然、飲レ酒乎、喫レ茶乎、二者之間、不レ可レ不レ擇也、

【訳】酒を飲もうか、お茶を飲もうか。酒の味は甘く、茶の味は苦い。甘い酒を飲めば飲み過ぎて酔ってしまう。心がふらふらになり意識がなくなり精気も身体も乱れてしまう。苦いお茶を飲めば数杯で止めにする。心は、さわやかですがすがしく、精気も身体もびのびとする。酒を飲むか、お茶を飲むか。この二つのどちらにするかは、はっきりわかっていることではないか。

四一 学の成り難きゆゑんのもの、余竊かに其の故を究むるに、他なし。嗜好情欲其の内を乱し、飢寒困窮其の外に迫り、屈抑沮敗し、終に挺特憤発以つて進取を期す能わざればなり。余を見るに亦多し。戒めざるべけんや。

學之所二以難一レ成者、余竊究二其故一、無レ他、嗜好情欲亂二其内一、而飢寒困窮迫二其外一、屈抑沮敗、終不レ能二挺特憤發以期一進取一也、余見亦多矣、可レ不レ戒乎、

【訳】学問が成就しにくいわけを、私なりに考えてみると、他でもない。飲食物の好みや情欲が心を乱し、飢えや寒さや貧しさが外から迫り、それらに負けてしまって、ついには、元気に心を奮い起こし進んでがんばってやろうとすることが

できなくなるのだ。私を顧みても、そういうことはとても多い。戒めずにはおれないと反省している。

四二　苟くも此の志を持すること、宛(あたか)も堅松古柏の霜雪を経て其の色を変ぜざるがごとくなれば、則ち学豈に成り難きの理あらんや。

苟持二此志一、宛如レ堅松古柏之經二霜雪一而不レ變二其色一也、則學豈有二難レ成之理一乎、

【訳】この志を持ち続けることは、まるで強く堅い松の木や成長した樫の木などが霜や雪にあたってもその色を少しも変えないように、かりにもその志を持ち続けなければ学問が成就することは難しいのだ。

四三　此の学苟くも成ることを得れば、則ち上は以つて父母の名を顕(あら)はすべく、下は以つて将来の子孫を庇(かば)ふべく、而して中は以つて此の身の栄を為すべし。豈に人生第一件の羨むべきの事にあらずや。

此學苟得レ成、則上可二以顯一父母之名一、下可二以庇一將来之子孫一、而中可二以爲一此身之榮一、豈非二人生第一件可レ羨之事一乎、

【訳】このようにして学問が成就すれば、まず自分より上の人では父母の名をいつまでも残すことになり、自分に続く子孫を守ってやることになり、中心である私は、栄誉この上ないことだ。なんと人生第一番の喜ぶべきことではないか。

44（20151205）

四四　人寿(じんじゅ)百年、赫奕(かくえき)たる富貴(ふうき)は、仮令(たとえ)以って平生の懐抱(かいほう)に快(こころよ)くとも、然(しか)れども達者(たつしや)よりこれを視れば、則ちまた是れ岩前の雲、草上(そうじょう)の露のごとくにして、曾(すなわ)ち以って吾が胸中に掛(か)くるに足らざるなり。而るに世人役役(せじんえきえき)としてこれを求めて止まず。適(まさ)に以って其の惑(まど)いを見るに足るのみ。

人壽百年、赫奕富貴、假令以快二平生之懐抱一、然自二達者一視レ之、則亦是岩前之雲、草上之露、曾不レ足二以掛一吾胸中一也、而世人役々求レ之不レ止、適足二以見一其惑一耳、

【訳】人の寿命は百年、光り輝くような富とか地位は、日頃の生活には胸一杯に快いもののようであっても、広く物事の分かっている人からみれば、岩の間から出てきたばかりの雲や草の上の露のようにはかないもので、私の心に掛けるほどのことではない。そうであるのに、世間の人は、身や心を労してまでこれを求ることをやめない。後は、そのことからくる悩みや、迷いを見るだけである。

四五　士の品は冷淡に成る。冷なれば則ち一切の毀誉得喪升沈の境に於いて、恬乎として競はず。淡なれば則ち声色貨利、凡百の嗜好の間に於いて、泊然として動かず。これを延蔓の物に譬ふるに、其の纏繞係縛を解けば、則ち自然に上達し去り、士の品此に於いてか成る。

士之品成二於冷淡一、冷則於二一切毀譽得喪升沉之境一、恬乎不レ競、淡則於二聲色貨利凡百嗜好之間一、泊然不レ動、譬二之延蔓之物一、解二其纏繞係縛一、則自然上達去、士之品於レ此乎成矣、

【訳】立派な人の品格というものは、冷淡(淡白)ということから生まれる。冷であれば、すべての悪口や称賛、そして成功や失敗の局面に立っても、物事にとらわれず自分を見失わないであわてない。淡であれば、華やかな生活や金儲けや、たくさんの自分のほしい物に囲まれていても、静かに無欲でそれを求めるために動き回らない。このことを、絡まりながら上に行く物に譬えれば、絡まっているものや自分を縛っているものを解けば、自然に上に達するのだ。立派な人の品格というものはこうしてできていくものだ。

四六　士の品は冷淡を以って成れば、則ち亦貪躁を以って敗る。其の初めは物を玩び味を嗜むも、痕跡未だ顕はれず。既にして沈溺迷惑すれば、復た反るべからず。此れより以往、匪類に交接し、辭受濫漫、口気面目特醜悪なるべし。士の品、是に於いてか復た言ふべきものなし。

士之品以二冷淡一成、則亦以二貪躁一敗、其初也玩レ物嗜レ味、痕跡未レ顕、即而沉溺迷惑、不レ可二復反一、自レ此以往、交二接匪類一、辭受濫漫、口氣面目特可二醜悪一、士之品、於レ是乎無レ可二復言一者一矣、

【訳】その品格というのは冷淡であることによってできていくのだが、それはまた、貪りをすることで品格は落ちてしまう。最初は、物で遊んだり、食べ物をたしんなんだしていても、品格が落ちたとは見えない。しばらくして、深みにはま

って物欲におぼれ食べたい物を食べていると再び元に返ることはできない。こうなってしまうと、それ以後悪い仲間と交わるようになって、節操がなくなり、物言いも顔つきも醜くなってしまう。士の品格が、このようになってしまうともう言うべきものは何もないということだ。

四七　人の過悪は、則ち其の自ら知らざるを恐る。これを知れば則ち又其の或ひは切ならざるを恐る。これを知りて苟くも切ならば、則ち一旦感激憤励して、旧窠を脱出し、更に新功を図る。古人言へる有り、「猶ほ日月の食のごとし」と。其の改むるに及びては、啻に其の旧を存せざるのみならず、特光明耀霊の反って一段の精采を加ふるを覚ゆるのみ。

人之過悪、則恐二其不一自知一也。知レ之則又恐二其或不一レ切也、知レ之苟切、則一旦感激憤勵、脱二出舊窠一、更圖二新功一、古人有レ言、猶如二日月之食一也、及二其改也一、不二啻不一レ在二其舊一、而特覺二光明耀靈反加二一段精采一也、

【訳】人が過ちをしても、自分でそのことを知らないことが一番恐ろしい。そのことを知ったとしても、真剣であるかどうか。そのことを知り、そして真剣であれば、たちまち深く思い努力して、今までの自分から抜け出し、新しい努力をしようとする。論語に言っているではないか。「太陽と月できる月食のようなものだ。月食がおきると（過ちを犯すと）みんな見ずにおれない。月食が終わると（過ちを改めると）、今度は仰ぐ」。過ちを改めると、古い自分が無くなるだけでなく、光り輝いて一段と輝きを増して来るのを自覚できる。

四八　此の心苟くも一切の世味の纏繞なければ、則ち脱洒自在にして、従容として快活なり。易に曰く、「天の衢を何う、亨る」と。

此心苟無二一切世味之纏繞一、則脱洒自在、従容快活、易曰、何二天之衢一亨、

【訳】この心に、一切の世俗のしがらみがなければ、すべてから解放され、自由で、さっぱりとして、元気に生活できる。『易』に言っているではないか。「天の衢を何う、亨る。＝天の道を背にして行動するように、物事にとらわれないで自由な境地に生きて行く」と。

四九　甚しきかな玩物の弊たるや。其の初めは則ち以って一時の消閒の具たるに過ぎず。既にしてこれを好むこと漸く深ければ、宛も饑食渇飲の復た闕くべからざるがごとく、終には沈溺迷惑して、

顧忌する所なし。寧ろ性命を決してこれに趨る。嗚乎、其の弊たるや尚し。

甚矣玩物之弊也、其初則不レ過以爲二一時消閒之具一也、既而好レ之漸深、宛如レ饑食渇飲之不レ可二復闕一、終而沉溺迷惑、無レ所二顧忌一、寧決二性命一而趨レ之、嗚乎其弊也尚矣、

【訳】物を玩ぶことの害は甚だしい。その初めは、退屈しのぎの物にすぎなかったものでも、これを好きになり少しずつ深まれば、まるで食べ物に餓え、喉が渇いて飲食物を欠くことができないように、その物におぼれ、迷い、顧みて恐れることがなくなってしまう。天から授かった生まれつきのすばらしいものを壊してしまう。ああ、その弊害はひどいものだ。

五〇　泉石盤陀の上、老松三五株あり。左右に激湍あり、屋を其の間に架す。菜を喫い水を飲み、生計粗足る。書を童に課し鶴糧を検し、**閒**事数件の外、他の塵紛の、吾が閑を妨ぐるなし。此れぞ是れ吾が輩の平生最も得意の境。然れども人各好む所あり。強いてこれを人に施すべからざるなり。

泉石盤陀之上、老松三五株、左右激湍、架二屋其間一、喫レ菜飲レ水、生計粗足、課二書童一検二鶴糧一、閒事数件之外、無二他塵紛妨二吾閑一、此是吾輩平生最得意之境、然而人各有レ所レ好、不レ可二強施一之於人一也、

【訳】水が流れ、岩の多い山間、古い松が数本立っている。左右に流れの早い瀬があり、その間に粗末な家を立てる。野菜を食べ、水を飲んで、暮らしはほぼできている。子供たちに書物を読むことを教え、わずかの食糧を気にかけ、そして幾つかの雑事があるだけで、他の煩わしさが私の悠々とした生活を邪魔することはない。これこそ私の、普段最も満足する生き方である。しかし、人はそれぞれ好むところがあるものだ。強いて人にこのような生き方を押しつけるつもりはない。

五一　風寒からず、日熱からず、緑陰新たに成り、蝉の声湧くがごとし。泉を汲みて茗を煎じ、以って睡魔を消す。或いは晋帖に臨み、或いは唐詩を誦し、優游閑適、以って吾が生を養う。方に他人よりこれを観れば、則ち何の況味の言うべきあらんや。然れども吾

が輩固より敢えてこれを以って三公に易えざるなり。

風不レ寒、日不レ熱、緑陰新成、蟬聲如レ湧、汲レ泉煎レ茗、以消二睡魔一、或臨二晉帖一、或誦二唐詩一、優游閑適、以養二吾生一、方自二他人一而觀レ之、則有二何況味之可レ言、然而吾輩固不二敢以レ此易二三公一也、

【訳】風は寒くもなく、日差しは暑くもなく、木々の葉は青々と茂り、蝉の声は湧き出て出てくるようだ。泉の水を汲んで茶を煎じ、それで眠気を覚ます。そして、古い法帖を見たり、唐詩を読誦し、ゆったりとしながら自分の生を充実させている。他の人がこんな様子を見れば、なんと味わいの無い暮らしぶりだと言うだろう。しかし、私にとっては、こういうことは、世の中の高位高官につくことなどとは、比べることのできないことだと思っている。

五二　蠹の虫たる、経伝を以って家となし、文字を以って食と為すものなり。其の色白皙、其の体脆弱にして、骨幹なく、筋力なし。狡猾にして善く逃げ、これを捕うるに獲難し。而も終日害を幽暗不識の地に為して休まず。凡そ物の悪むべきもの、蠹に若くものなし。吾蠹説をつくる。而して世の蠹に類するもの、以って自ら警省すべし。

蠹之爲レ蟲、以二經傳一爲レ家、以二文字一爲レ食者也、其色白皙、其體脆弱、無二骨幹一、無二筋力一、狡黠善逃、捕レ之難レ獲、而終日爲二害於幽暗不識之地一而不レ休、凡物之可レ悪者、無二蠹若一焉、吾作二蠹説一、而世之類レ蠹者、可二以自警省一矣、

【訳】蠹の虫（しみ）というムシは、経書やその注釈書を住処として、書かれている文字を食べものとしている。その色は白く、その体は脆弱で、骨もなく、筋力もない。ずる賢く逃げるのがうまく、なかなか捕まえられない。しかも、終日暗く見つからないようなところで、いつのまにか害を与えてやまない。この虫ほど憎むべきものはない。私は、このような様子を蠹の説と名づけた。世の中の蠹の虫のような学者は、自ら反省すべきだ。

五三　礼の九容は、便ち是れ人を做すの法なり。此の功苟くも成らば、則ち人道完し。これより以往、進みては則ち以って公卿の位に升りて、其の望を失はざるべし。退きては則ち以って田畝市井の間に伏して慊なかるべし。軒冕珠玉、敝衣緼袍は、乃ち外より来たる

もの、我れに於ては加損する所なし。男児此の地位に至りて、始めて巍巍蕩蕩として世に出づること一番に背かずと謂ふべし。

禮之九容、便是做人之法、此功苟成、則人道完矣、自此以往、進則可以升乎公卿之位、而不失其望、退則可以伏乎田畝市井之間、而無慊、軒冕珠玉、敝衣緼袍、乃従外来者、於我無所加損、男児至此地位、始可謂巍々蕩々不背出世一番矣、

【訳】礼（生活軌範・作法）における九容（目、口、手、頭、足、声、気　立、色などの容姿態度姿勢）のありかたは、人となるために最適な方法である。これが本当にできるにように成ると、人のありようとして、全てが備わったということだ。そうなると、上位者になっても、高官の位についても、その人望を失くすようなことはない。逆に無位無官の民間庶民のなかにあっても、不満足であきたらぬ態度姿勢などしないものだ。高位高官につくとか、下位の身分になるとかは、自分の外側から来ることで、私にとっては関係ないことだ。男子たるもの、このような考えに立って、気品高く大きく世の中に出ても背かないでほしいものだ。